

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：31309

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02543

研究課題名（和文）戦後改革期における教育の専門的自律性論議に関する実証的研究

研究課題名（英文）An Empirical Study on Arguments about the Professional Autonomy of Education in the Post-war Period

研究代表者

岡 敬一郎（OKA, Keiichiro）

仙台白百合女子大学・人間学部・教授

研究者番号：90449968

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：富山県・東京都への訪問調査を実施して、南原繁に関する資料を収集・分析した。成果は以下のとおりである。第一に、南原が富山県射水郡長を務めていた時期に発表した「何たるべきか」の分析を通じて、彼が当時有していた教職観の一端を明らかにした。第二に、射水市新湊博物館が所蔵する片口屋文書から南原繁書簡・葉書を紹介し、南原と片口安太郎の長年にわたる交流や協力関係を明らかにした。第三に、射水市中央図書館所蔵の旧「片口文庫」について調査し、「郷土資料」部分に関する新たな目録を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

南原繁が郡長を務めていた当時の富山県射水郡に関する資料について、博物館や図書館の担当者から貴重な示唆を得ながら、残存状況を確認することができた。当時の南原が、自らの経験を基にした素朴な認識ではあるものの、教師に対して教育の内容・方法に関する力量を求めていたこと、また郡立農業公民学校創設を通じて、南原と片口安太郎が協力関係を築いていたことを確認し、南原における教育の専門性認識の生成の一端を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：To gather and analyze materials on Shigeru Nambara, I visited Toyama Prefecture and Tokyo. The findings is as follows. The first is that I have clarified his philosophy of the teaching profession as the head of Imizu district from analysis of his article. The second is that I have revealed the interaction and cooperative relationship between Shigeru Nambara and Yasutaro Kataguchi through Introducing Nambara's letters and postcards in the Kataguchiya document owned by Imizu City Shinminato Museum. The third is that I created the new catalog for part of former Kataguchi collection owned by Imizu City Central Library.

研究分野：教育行政学

キーワード：南原繁 教育行政 教職 専門性 戦後教育改革 射水郡 片口安太郎 農業公民学校

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

教育行政学において、教育の専門性はどのように理解されているのか。『日本教育行政学会年報』の年報フォーラムから読み取ってみたい。

第41号(2015年)「政治主導改革と教育の専門性」では、教育の専門性が継続性、安定性、中立性を確かに保って教育行政を行うための仕組みの鍵となる概念として提示され、制度の改定において教育の専門性がどのように受け止められ、考えられてきたのか、あるいは考えられるべきかを問う必要があると論じられた。教育行政学における教育の専門性認識について、一つの見識を示したものと言えよう。

しかし、教育の専門性を前提とした理論構築は揺らぎを見せている。例えば教育委員会制度改革について、同号では、教育の専門性に依拠した教育行政システムの行き詰まりに対処するという言説構造になっていると指摘された。また第43号(2017年)「教員政策の教育行政学的研究」において、教員は官僚、労働者、専門職(家)という多面的な側面を有するとされている。さらに最近の教育行政学での教育行政の中立性に関する議論について、第45号(2019年)「教育における公共性の再検討」では、教育行政を政治から隔絶された真空状態に置くような非現実的な想定をしない、準専門職である教員に白紙委任するべきという夢想も抱かない、といった表現が用いられている。教育の専門性が否定されているわけではないが、教育の専門性だけに依拠して教育の自律性を確保し、他からの干渉を排除しようとする態度は、もはや許されないということである。

教育の専門性はなぜこのような再定位を求められるのだろうか。教育の専門性という言葉からは、教育の内容や方法に関する教員の専門性がまず想起されるかもしれない。しかし、学校に求められる役割が拡大し、いわゆるチームとしての学校が家庭や地域だけでなく各種の専門スタッフとの連携・協働を求められる現状において、教員の専門性は教育の内容や方法に限定され得ない。さらに、学校における専門性の変容は教育行政における専門性にも波及する。多様な連携・協働に対する支援が、教育行政職員のみならず一般行政職員を含めた多様な担い手を必要とするからである。したがって、教育の専門性については、誰がどのような専門性を担い、制度のなかでどのように位置づけられていくのか、すなわち担い手と内容の多様性を踏まえた再定位が求められることになる。

2. 研究の目的

上述の問いに答える方法の一つとして、本研究は戦後改革期を取り上げる。教育のあり方が広く論じられ、現行の教育制度に直接つながる多くの改革がなされたにもかかわらず、当時の教育の専門的自律性論議に対する理解は正確でないように思われるからである。

戦後教育行政改革によって導入された教育委員会制度は、民主化、地方分権化、一般行政からの独立という基本理念のもとで、民主性と専門性を制度原理としていた。しかし当時、専門性に関する理論が未成熟だったことに加えて、民主性と専門性との間の緊張関係がそれほど注目されなかったことも事実であろう。その後、教育の専門性に関する理論が精緻化されるとともに教育の自律性の確保が図られるなかで、戦後改革期における教育の専門性認識は自律性と調和的な側面からの理解が重視され、結果的に民主性や代表性との関係を問われる機会を失ってしまったのではないだろうか。

従来の教育行政研究は、田中耕太郎と南原繁を中心に戦後教育行政改革を描いてきた。前者は文部省学校教育局長、文部大臣、参議院文教委員会委員長として、後者は東京(帝国)大学総長、米国教育使節団に協力すべき日本側教育家委員会委員長、教育刷新委員会(副)委員長として、ともに戦後改革に深く関わり、重要な役割を担った人物である。

田中については、彼の大学区構想における教育行政の一般行政からの独立と学者・教育者の自主権確保の主張が教育委員会制度に引き継がれたと考えられてきた。しかし、文部省作成の法律案に関する研究からは、田中の構想が教育行政プロパー官僚の支配を志向していたことが指摘されている。そこで応募者は、田中の著書・論文を再検討し、彼の「教育権の独立」論がいわゆる「教師の教育権」の主張の源流をなすとの解釈には限定的な理解が必要であるとの結論を得た。田中において、教職の専門性は限定的にとらえられ、教育の専門性が官僚統制と調和的に語られていたのである。

他方、南原は田中の構想が文部省による新たな集権化の危険性を持つことを批判し、公選制教育委員会の導入を支持した。応募者は、南原の教育関係の著書・論文のほか、戦後改革期に活動した日本側諸機関の記録類を分析することによって、彼の戦後教育行政改革構想について考察した。南原は教育の民主化と地方分権化を達成するために、文部省に対して教育者の自主性の尊重と指揮監督から指導助言、条件整備への性格転換を求めると同時に、教育委員会の設置を求めていた。

では、南原は教育の専門性をどのように認識していたのか。従来の研究は、応募者も含めて、彼が民主性を重視していたことを指摘する一方で、資料的制約もあって、彼の教育の専門性認識を明らかにできていないのである。そこで本研究は、戦後改革期における教育の専門的自律性論議に対して南原が果たした役割に着目し、南原における教育の専門性認識の生成をその源流である戦前の内務省時代にさかのぼって検討することによって、教育の専門性の内実と位置づけを歴史的視点から問い直すことを目的とする。

3. 研究の方法

南原繁における教育の専門性認識を検討するための分析対象としては、彼の教育にかかわる著書・論文や活動以外にも、教育以外の分野とくに政治学関係の著書・論文、大正期における内務省での活動、内務省時代以降の東京（帝国）大学での活動、戦後改革期における占領軍側の諸機関の記録類などが考えられる。本研究はこれらの中から内務省時代の活動を取り上げ、富山県射水郡長としての地方行政の経験に着目する。

南原が郡長を務めた射水郡は、現在、市町村合併によって富山県射水市となっている。そこで、射水市を中心に富山県内に残されている資料を、現地に赴いて収集する。郡長としての活動は教育との接点も多く、南原自身の回想とともに分析することによって、彼の教育観や教師観を抽出できるであろう。さらに、郡長という地位に鑑み、教育行政と一般行政の関係を彼がどのように理解していたのか探りたいと考える。

4. 研究成果

研究期間全体を通じて、富山県・東京都への訪問調査を実施し、南原繁および戦後教育改革に関する資料を収集・分析してきた。当時の富山県射水郡に関する資料の保存状況について、博物館や図書館の担当者から貴重な示唆を得ることができ、射水郡長時代の南原に関する研究に対する資料面の制約を知らずも実感することとなった。しかし、そのようななかで、当時の南原の思想について理解を深めることができた。

論文「射水郡長期の南原繁における教職観 - 『何たるべきか』の分析を通じて - 」では、南原が富山県射水郡長として『富山県教育会雑誌』に寄稿した「何たるべきか」の分析を通じて、彼が当時有していた教職観の一端を明らかにした。南原は、教員に対する積極的な思いを持って教員養成所に入り、勉強に励んで小学校准教員の検定に合格した。実際に教員になったわけではないものの、彼の論述からは教育に関する学問を勉強して免状を取得したが故の自信のようなものが感じられた。そして、南原が自ら出会った小学校時代の先生のことを振り返りながら教師に求めたのは、教育の内容・方法に関する力量と教師としての心・魂の両面であった。前者は「学問」、「学識」や「教法に関する技能」であり、後者は「真面目の心」、「一生懸命の心」、「児童に対する真心」、「愛の心」と表現される。南原は後者を第一の要件と定めつつも、常に両面が並び立つ形で論じていた。自らの経験を基にした素朴な認識ではあるものの、射水郡長期の南原が教師に対して心や魂の問題だけでなく教育の内容・方法に関する力量も求めていたことを確認できたのは、南原における教育の専門性認識の生成を検討するという本研究の目的に照らして大きな発見であった。

資料紹介「射水市新湊博物館所蔵片口屋文書より南原繁書簡・葉書」では、射水市新湊博物館が寄贈および寄託を受けて整理と目録作成を実施している片口屋文書から、南原繁書簡・葉書を紹介した。南原と片口安太郎の交流は、南原が内務省在籍中に射水郡長を務めたことが契機となった。いわゆる「青年郡長」の特質の一つとして「地方の教育問題に、異常なまでの熱意を持って臨んでいたこと」があげられているように、南原もまた射水郡長在任中に郡立農業公民学校創設を立案したことで知られる。射水郡長時代の南原に関する研究は資料面の制約が大きい、南原と片口の長年にわたる交流を示す本資料から、郡立農業公民学校創設を通じた二人の協力関係の一端が垣間見えることとなった。

さらに、射水市中央図書館所蔵の旧「片口文庫」について調査し、その一部を目録化した。南原が射水郡長時代に親交を深めた片口安太郎に関する旧「片口文庫」は、元々小杉町立図書館に所蔵され、『小杉町立図書館蔵片口文庫目録 1983』も作成されていたが、小杉町の近隣4市町村との合併に伴って射水市中央図書館に引き継がれ、内容に応じて再分類され、書庫に収められている。今回、射水市中央図書館より書庫内調査の許可を得て、小杉町立図書館時代の目録に掲載された1466タイトルについて確認した。資料が内容に応じて再分類されていたことに加えて、紛失したと思われる資料や目録とは異なる番号が付されている資料などがあり、確認作業は困難なものとなったが、「郷土資料」部分に関する新たな目録を作成することができた。

その他、富山県立図書館、高岡市立中央図書館、射水市中央図書館において、郷土資料および新聞資料を閲覧した。新聞資料については、富山県で当時発行されていた『北陸政報』、『富山日報』、『富山新報』、『高岡新報』、『北陸タイムス』の5紙を対象とした。南原の約2年にわたる射水郡長時代について、各紙から関係する記事を抽出して収集した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 岡 敬一郎	4. 巻 27
2. 論文標題 射水市新湊博物館所蔵片口屋文書より 南原繁書簡・葉書	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 仙台白百合女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 27～36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24627/sswc.27.0_27	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡敬一郎	4. 巻 25
2. 論文標題 射水郡長期の南原繁における教職観 - 「何たるべきか」の分析を通じて -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 仙台白百合女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 23～31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24627/sswc.25.0_23	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------